

2000.7

岡村昭彦の会

NO.10

ホスピスの現在、そしてホスピスの未来。

桜町病院ホスピス科部長・山崎章郎氏をお迎えして



講演中の山崎章郎(ふみお)氏

第15回AKIHIKOの会開催

岡村昭彦が亡くなって節目の一五年。毎年、岡村昭彦の命日にちなんで開かれている「AKIHIKOの会」が、今年も三月二〇日に、東京神楽坂・日本出版クラブ会館で催されました。

昨年の暮れには『定本・ホスピスへの遠い道』（春秋社）が刊行されました。（21世紀の看護を考えるルポルタージュ）として一五年以上に書かれたもの、それが21世紀を前に今度は（現代

ホスピスのバックグラウンドを知るため）の書として蘇ったのです。

そこで今年の「AKIHIKOの会」は、岡村昭彦没後一五周年と21世紀に継がる『定本・ホスピスへの遠い道』の刊行にふさわしい内容をというこで、本書の序文を書いていただいた日本を代表するホスピス医の山崎章郎氏に記念講演をお願いしました。

山崎章郎氏は『定本・ホスピスへの遠い道』の序文で「この本を読了して胸の高鳴りを抑えることができなかった」「もう一度根本から私自身の取り組みを検証してみようとおもった」そして「岡村さん、今に見ていてください。貴方の期待にこえましよう」と述べています。

山崎さんにとつてもベストセラーとなった著書『病院で死ぬということ』から一〇年目、ホスピス運動の転換点を見据えて「ホスピスの現在、そしてホスピスの未来」について熱く語っていただきました。「患者が自分の病名・病状を知らされない緩和ケアなんてホスピスじゃない」と、ホスピスケアを考えるうえでの問題点を数多く指摘されました。参加者も例年より多い七十七名。第二部懇親会には山崎さんも参加。楽しい会になりました。

現在の問題点を語らなければ

未来は語れない

山崎章郎

今日、お話するのはホスピスの現在と未来についてですが、主に現在の問題点をお話します。現在の問題点を語らなければ未来は語れないと考えるからです。

一九九四年に独立型のホスピス棟をつくりました。それまでは病院内ホスピスだったの



です。たぶん今のビデオをご覧になって、きれいだなと思つてくださったのだと思いますし、われわれもそう思つています。多くのご家族の方も木々に囲まれた環境をいいと思つてくださっていますが、ときには、ここはとも落ち着かないと一般病棟に移られる方も、少数ですがいます。(ホスピスはご自身が生きてきた環境に合っているようなところがいいのだらうと思います。

それからあのような環境がなければホスピスケアができないのかという点についてですが、私どもはあの病棟ができる前は一般病棟の一部を借りてホスピス医療を行っていました。そしてそのソフトとしての医療の部分に関しては外見が変わっても何ら変わっていないと思います。一般病棟で一二ベッド、四人部屋が二つの個室が四つでした。それで四人部屋ではプライバシーを守ることがむずかしかつたのです。カーテンで仕切られた空間の中で排泄をせざるえない場合や深刻な話をしなくてはならない場合もあるわけです。そのようないろいろなことや思いがあつて、ああいふ建物に結集していったのです。

赤字を救つてくれた 緩和ケア病棟認定制度

では、これから本題に入ります。ホスピスケアについては、私のキャリアはそう長いほうではありません。わが国でホスピスケアを始めたのは一九八三年に浜松の聖隷三方原病院が初めてで、その後一九八四年に淀川キリスト教病院にできました。当初は、どこのホスピスも大きな赤字を余儀なくされてしまつた。それで厚生省でも今後、末期医療は重要だという医療の位置づけをして、一九九〇年に厚生省の施設基準、個室や家族のいる空間などを満たすと、緩和ケア病棟という認定を受けることができるようになりました。この認定を受けると当時で二万五千円の定額医療費が支給されました。二万五千円というのは当時は高額な医療費でした。私どもは一般病棟だったため、緩和ケア病棟の認定を受けることができず、医療費は出来高払いで一人当たり二万円弱でした。当時、緩和ケア病棟の施設は全国で五施設、一二九ベッドでした。

この定額医療費は上がつて、昨年では一人当たり三万八千円です。そのため、ここにきて急速に緩和ケア病棟の認定を受ける施設、病院が増えてきて、昨年一二月現在で六八施設、総ベッド数として一二三二ベッドが認定を受けています。